

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 消えない思い出：生月島と三体様

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 茂木, 栄, Mogi, Sakae メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000638

消えない思い出——生月島と三体様

茂木 栄

今年度で大学の定年を迎える。大学院生時代を含めて45年以上も祭りや神事芸能、神社、民俗行事、風土の調査研究に従事してきた。その中で強く印象に残っている私の担当演習のテーマと調査があった。

近年、演習ではイエズス会士たちが残した書簡を読む¹⁾ということをしてきた。

長崎県のカトリック教会群をユネスコの世界文化遺産登録にとの長崎県の構想²⁾（一度申請を退けられた）があることを知ったのは、書簡の記述を追って、現地調査に入ってから後のことであった。

現在でも、カクレキリシタン³⁾の信仰伝統を継承している住人たちが平戸市生月島（いきつきしま）には居住している。私もお祭りを何度か見学させていただいた。本学の共同研究「共存学プロジェクト」の先生たちにも、宗教の共存の形を見ていただくために生月島へご案内した。その折にカクレキリシタンの聖地、中の江島（サンジュアン様、三体様とも呼ばれる。正月聖水を汲む島）に行くことができた。カクレキリシタンの信仰を継承している家筋の船主さんに連れて行っていた。まだ世界遺産登録のなる遙か以前のことである。そこで禪姿の殉教者の石像三体が祀られているのを見た（現在は、特別な許可が無い限り渡島はできない）。私はこの調査研究のテーマを「かくれキリシタンにみる人神信仰⁴⁾」と定めた。人を神と崇めることなど、およそキリスト教にとつてあり得ないことである。しかし、生月島カクレキリシタンのお祭りでは、殉教者を神として祀っていた。生月のオラシヨ（Orashioラテン語で祈祷文の意）には「神寄せ」があるが、長崎や五島地方には見られない。生月ではオラシヨを唱えはじめる前に、多いもので五十体あまりの神々を呼び寄せる。「この神様を寄せるという感覚は、神道的様式の影響を強く受けたものであるといえよう。神寄せがすむと『申し上げ（申し立て）』がなされる。これから行なう行事の目的、願いをあらかじめ神様に申し上げるのである⁵⁾」という形は、紛れもなく中世起源の霜月神楽の神下ろしの定型である。

また、儀礼の全体構造については「カクレキリシタン行事の基本形は、(1)神様にお供物をお供えしてオラシヨを上げる、(2)神様からのお下がりを受け直会の神人共食を行う、(3)宴会に移って信徒間の親睦・交流を深める、という三部形式よりなっている。神道行事の構造と全く同一である」というように全体構造もまた、神道の祭祀に極めて類似した形になっているのである。

生月島の人たちは明治以降のカトリック教会への転宗の誘いを断って、独自のカクレキリシタンの伝統を守り、信仰体系を維持してきた。それが、中世キリスト教文化と日本の民俗信仰の融合した日本化の形なのであった。

教会群を諦めカクレキリシタンを前面に出して、再度ユネスコ世界遺産登録申請をし直した「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」で、世界遺産登録が決まった。

しかし、なぜかカクレキリシタンの信仰が生きる生月島の名が無かった。「現代のかくれキリシタンの存在は、あたかも意図的に『消された』かのように見えるのだ」とは、生月島の人々を取材した広野真嗣氏の言葉である。

日本化した独自のカクレキリシタン信仰は不都合であったのだろうか。生月島の沖合にある中の江島(三体様)は関連遺産となった。

三体様の石像の表情と姿が脳裏から離れない。

註

(1)『イエズス会士日本通信』上・下2巻(雄松堂書店、1968年刊)、『イエズス会士日本年報』上・下2巻(雄松堂書店、1969年刊)、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』全4巻(東洋文庫58)、平凡社、1994年刊]

(2)カクレキリシタンの表記については幾つかあるが、下記、長崎県教育委員会の報告書の表記に従った。

(3)拙稿「かくれキリシタンにみる人神信仰」『人神信仰の歴史民俗学的研究』松崎憲三編、岩田書院、2014年刊]

(4)『長崎県のカクレキリシタン——長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書——』(長崎県文化財調査報告書第133集)長崎県教育委員会、1999年刊、9頁]

(5)註4に同じ]

(6)広野真嗣『消された信仰「最後のかくれキリシタン」——長崎・生月島の人々』小学館 2018年刊]

(日本民俗学・民俗芸能学・祭祀研究・社叢学)